

「みやぎ・仙台 日本一！百選」の発行について

宮城県では、豊かな食材や多様な産業、歴史・文化など、県内の様々な魅力を多くの方々に知っていただく機会として、ご当地検定「宮城マスター検定」を平成19年度から実施しております。

「宮城マスター検定」への挑戦により、宮城に関する様々な知識を得た方々が、県内の観光や祭りへの参加などを通じて、奥深く幅広い宮城の魅力を感じていただき、宮城への郷土愛を深め、また、自らが宮城の魅力の情報発信者となることで、宮城に人が集まり、地域産業が活性化され、「富県宮城の実現」につなげていくことを目指しています。

この冊子「みやぎ・仙台 日本一！百選」は、「宮城マスター検定」1級試験合格者の会「いっきゅう会」の皆様との全面的なご協力を得て、宮城が“日本一”や“発祥の地”などの視点で魅力を凝縮した冊子です。今後、観光客に対する“おもてなし”のための資料として、また、子どもたちが、地域の自然・歴史・文化など、誇るべきものを学ぶための教材として活用してもらうため、観光関係者や教育関係者等に配布する予定としています。

☆百選の特徴

- ・「宮城マスター検定」1級試験合格者の会「いっきゅう会」の会員が、自ら取材等を行い、独自の視点・切り口で原稿を作成
- ・宮城が“日本一”や“発祥の地”、“国内唯一”といったものを選定
- ・「自然」「産物」「文化・教育・スポーツ」「施設・構造物」「交通」「人物」の6分野で整理

☆百選6分野と掲載項目（例）

- 自然 …… 渡り鳥の楽園／宮城県はガン・カモ類の飛来数が日本一
- 産物 …… 古川(大崎市)は「ササニシキ・ひとめぼれ・だて正夢」発祥の地
- 文化・教育・スポーツ …… 五輪フィギュアで男女とも仙台ゆかりの選手が日本初の金メダル
- 施設・構造物 …… 三居沢は日本の水力発電の発祥の地で今も発電を続けている
- 交通 …… 利府町「JR 東日本新幹線総合車両センター」の広さは日本一
- 人物 …… 作品数770作品は世界一／ギネス記録の萬画家・石ノ森章太郎

南三陸町に世界で初めてのアイスロードからモイ寄贈!

みやぎ・仙台 No.1 GUIDE 100 SELECTION

二重ノイチモイ寄贈
みやぎ・センダイ

「No.1」
宮城県は日本一の鳥の宝庫!

歴新金山は「日本最大の金塊 モンスタースタイル」の産出地である

鳴子ダムは日本人のみの手による日本初のアーチダムである!

仙台駅西口駅前に広がるペDESTリアンデッキの規模は日本一!

志賀潔は赤痢菌を発見し文化勲章を受賞!

復興へ頑張ろう! みやぎ

編集・発行:宮城県 原稿作成・取材協力:いっきゅう会

〈一例 (渡り鳥の楽園 宮城県はガン・カモ類の飛来数が日本一!)〉

渡り鳥の楽園 宮城県はガン・カモ類の飛来数が日本一!

みやぎの自然 **日本一** 登米市・栗原市・大崎市

伊豆沼に休む渡り鳥

マガンのV字編隊飛行

朝のマガンの飛び立ち

毎年1月中旬に環境省から依頼を受けて各都道府県が実施する「ガン・カモ類の生息調査」(対象:ガン、カモ、ハクチョウ類)によると、これら渡り鳥の**宮城県への飛来数は日本一**である。2018年(平成30年)1月の結果では310,949羽。ガン類221,228羽、カモ類76,775羽、ハクチョウ類12,946羽で**全国の16%**を占める。**過去5年間の平均でも宮城県が14%を占め1位**であり、国内での渡り鳥の重要な越冬場所となっている。特にガン類は、**日本に飛来する約9割**が宮城県に飛来している。県内の調査地点約500カ所の中で、**ラムサール条約湿地の「伊豆沼・内沼」(1985年指定)、「蕪栗沼・周辺水田」(2005年指定)、「七女沼」(2008年指定)**への飛来数が多い。

年度	項目	総数	宮城県	ガン類数	宮城県	暫定値
平成29年度		1,919,522	310,949	233,289	221,228	
平成28年度		1,850,911	226,167	191,336	169,290	
平成27年度		1,947,269	239,086	186,932	174,955	
平成26年度		1,886,555	270,873	211,945	187,023	
平成25年度		1,883,352	235,693	185,670	153,389	
平均		1,897,522	256,558	202,234	181,177	
全国比			14%		90%	

マガン

オオハクチョウ

なぜ宮城県への飛来が多いのか

秋から冬に極東ロシアから渡ってくるガンやカモ、ハクチョウ類が越冬するには、水面が凍結せず、外敵が進入しにくい場所となりうる湖沼・河川で、周辺に餌場があることが重要である。伊豆沼・内沼など宮城県の湖沼は冬期に凍結せず、周辺には餌となる稲刈り後の落ち穂が多い広大な水田が広がり、越冬には好条件の場所である。蕪栗沼はラムサール条約湿地に指定されたが、沼だけでなく餌場の「周辺水田」も指定されている。「水田」という、人が手を加えた人工物が指定された例は珍しい。

必見! マガンの「朝の飛び立ち」と「夕方のおぐら入り」

マガンは、美しいV字型の編隊を組んで飛ぶことのできる鳥である。マガンの9割が宮城県に、しかも、県北に集中することから、この風景が冬期間日常的に見られるスポットは宮城県北以外ほとんどない。このマガンの編隊飛行は、早朝に沼から飛び立ち周辺の水田に向かう途中と、夕方に戻ってくる時に見られる。「朝の飛び立ち」は、一気に数百羽単位で飛び立つことから、その羽音と空を舞う数の凄さに圧倒される。「夕方のおぐら入り」は、数羽から十数羽単位で静かな沼に戻ることが多く、この風景も趣がある。マガンの観察は、早朝や夕方時間帯がベストである。1940年(昭和15年)、日本に約6万羽いたガン類は、狩猟対象だったことから一時約5,000羽まで減少した。1971年(昭和46年)に天然記念物となってからは徐々に増加、1998年(平成10年)には1940年(昭和15年)の羽数まで回復し、その後も増加を続けて今に至っている。

マガンと人間の共存

マガンは1970年代頃までは農家にとっては厄介な鳥だった。マガンの飛来は9月下旬に始まり、棒がけやはせがけで水田に干していた稲穂を食べていたためである。しかし、その後、食害に対する捕獲制度が整備されるなどしたほか、1985年(昭和60年)に伊豆沼・内沼がラムサール条約湿地に指定されることで、マガンと人間の共存に対する機運も高まった。他方、農業の機械化が進み、稲束を水田に干す必要が無くなりマガンの食害の心配も無くなっている。現在では、米を栽培しない時期にも田に水を張り、マガンが飛来する環境を整える「ふゆみずたんぼ」という取り組みもなされており、マガンと人間の共存が図られている。